広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	中国における志賀直哉「転生」の三種の翻訳に関する考察 : 張我軍の訳文を中心に
Author(s)	陳, 佳雯
Citation	表現技術研究 , 18 : 11 - 27
Issue Date	2023-03-31
DOI	
Self DOI	10.15027/53867
URL	https://doi.org/10.15027/53867
Right	
Relation	

中国における志賀直哉「転生」の三種の翻訳に関する考察
—張我軍の訳文を中心に—

陳　佳雯

はじめに

志賀直哉の短篇小説「転生」（『文芸春秋』第 2 巻第 3 期、1924 年 3 月）では、短気な夫と気の利かない妻が鴛鴦に転生することを約束したが、妻がその約束の内容を忘れてしまう。妻は狐に転生したあと、本能を抑えきれずに鴛鴦の夫を食べてしまった。

「転生」には、以下の通り、三つの中国語訳がある。

①張我軍（チャンウォジュン）訳「再世（次回改名：转生）」（『日文与日語』第 1 巻第 9 期・第 10 期、1934 年 9 月・10 月）
②錢稲孫（チィェンダオスン）訳「转生」（『北平近代科学図書館館刊』（後は『北京近代科学図書館館刊』、以下『館刊』と略称）第 3 期・第 4 期、1938 年 3 月・7 月）
③楼適夷（ロウシーイー）訳「转生」（『牽牛花』湖南人民出版社、1981 年 8 月）

従来、①と③に関する研究は皆無である。また、②を分析した論は一本[1]あるものの、まだ反論の余地がある。

翻訳理論家アンドレ・レフェブリー（André Lefevere）の提案したリライト理論[2]によれば、リライトの過程で、同じ原作でもリライター（訳者）によって、または時代によって、さまざまな形態が生まれるという。実際に、この三つの中国語訳は全く異なる翻訳スタイルを持っている。

本稿で主に論じる①は、訳者の張我軍が北京在住時代に訳した作品である。しかし張の先行研究においては、彼の台湾新文学運動に関する研究は多いが、北京在住時代の研究は比較的少ない。さらに北京在住時代の翻訳研究は張が訳した作品の紹介にとどまっている[3]。訳文を具体的に分析したのは、夏目漱石『文学論』訳を対象に論じた一本だけである。王向遠は「“翻訳度”与欠陥翻訳及訳文老化－以張我軍訳夏目漱石《文学論》為例」[4]で、張の訳文に

---

[1] 呉衛峰「銭稲孫による日本小説の中国語訳：志賀直哉の『轉生』を中心に」『東北公益文科大学総合研究論集』2014 年 2 月。

[2] André Lefevere.*Translation,Rewriting and the Manipulation of Literary Fame*,London&New York: Routledge,1992.
なお、リライト理論に使われる専門用語に揺れがあるため、本稿における専門用語と関連語句は『翻訳研究のキーワード』（モナ・ベイカー、ガブリエラ・サルダーニャ編、藤濤文子監修・翻訳、伊原紀子、田辺希久子訳、研究社、2013 年 9 月）を参照する。

[3] 張泉「張我軍与淪陥時期的中日文学関連」（『中国現代文学研究叢刊』2000 年 1 月）、徐紀陽「張我軍的翻訳活動与“五四”思潮—兼論与魯迅、周作人之関係」（『瀋陽師範大学学報（社会科学版）』2011 年 12 月）などがある。

[4] 『日語学習与研究』2015 年 12 月。「訳文老化」とは、言語・翻訳スタイル・思想におい

は現代中国語からかなりかけ離れた表現が多いことを検証した。しかし、張我軍の翻訳に関する研究はまだ不十分であろう。彼の翻訳能力を高く評価した言説は数多くあるが、その証明のためには、より多くの具体的な訳文研究が必要だと思われる。

本稿では①・②・③の具体的訳文の比較検討を行い、中国における志賀直哉「転生」の初の訳文である①の考察を進める。リライト理論を踏まえて、リライトに影響を及ぼす要素として、＜支援（patronage)＞・＜イデオロギー（ideology）＞・＜詩学（poetics)＞・＜言説領域（universe of discourse)＞・＜言語（language)＞を取り上げ、これまで論じられてこなかった①のリライトの原因および選定理由を考察する。さらに①の訳文分析によって張我軍の優れた翻訳能力も示していきたい。

1. 張我軍と志賀直哉

「はじめに」で示した①の訳者、張我軍についてまず述べる。張我軍（1902 年～1955 年）は日本国籍を持つ台湾人[5]として台北市板橋区に生まれた。以下に『張我軍全集（下）』（台海出版社、2012 年 9 月）にまとめられた年譜を参照し、言語における教育・職業などの略歴を紹介する。

日本語に関する履歴：

1909 年　日本人が設立した板橋公学校[6]に入学する。

1915 年　板橋公学校を卒業する。

1923 年　日本語で作成した処女作「南支那に於ける排日対策」を東京で発行された月刊『台湾』（1923 年 7 月）に発表した。

1929 年　北京師範大学国文系を卒業後、自宅で日本語塾を開設しながら、北京師範大

て、過去の翻訳が現在の時代よりも遅れている現象を指す。

[5] 1895 年の下関条約または日清講和条約によって、台湾・遼東半島・澎湖列島が日本へ割譲された。割与地に住んでいる住人は「日本国民」とみなされた。

「当時、台湾人は日本国籍であるため、日本政府が 1938 年に公布した『国民総動員法』と 1939 年に公布した『国民徴用令』に縛られていた。陥落時期、警官の制服に短剣を佩いた日本人の警官が家に「ご光臨」するのを何度か見かけた。表向きは父に親切だったが、実は台湾の「日本国民」であることを忘れないようにと父に注意していたのであった。しかし父は、決して日本が中国を支配するための道具にはならなかった。(那时，台湾人属日本国籍，当然要受日本政府 1938 年颁布的《国民总动员法》和 1939 年颁布的《国民征用令》管束。沦陷时期，好几次看见身着警服，佩带短剑的日本警官“光临”我家，表面上对父亲客客气气，实际上是提醒他：不要忘了自己是台湾的“日本国民”。但是父亲坚决不当日本统治中国的工具。)」張光正『悲、歡、離聚話我家－－－一個台湾人家庭的故事』（張光正編『近観張我軍』台海出版社、2002 年 2 月、70 頁）を参照。

[6]「「公学校」というのは、日本人が台湾の小学生のために設立したもので、日本の子どもたちが通う「小学校」とは、教師のレベルも経費もかなり異なる。（所谓“公学校”，是日本人专为台湾小学生开办的，同日本儿童就读的“小学校”，无论师资或经费，都要差得多。）」張光正『悲、歡、離聚話我家－－－一個台湾人家庭的故事』（張光正編『近観張我軍』台海出版社、2002 年 2 月、61 頁）を参照。

学、北京大学、中国大学で日本語講師を務めていた。

1937 年　盧溝橋事件で北京が陥落した後、北京近代科学図書館で日本語講師として働いていた。また傀儡政権下の北京大学文学院日本文学系、北京大学工学院、外国語学院文学系で教授を務めていた。

全集の年譜には 6 年間の公学校の履歴だけが記録されているが、張我軍本人は「8 歳の時から 20 代まで日本の学校に通った(我从八岁的时候就读日本的学校，一直读到二十多岁。)」[7]と述べている。したがって、長い間台湾で強制されていた日本語「国語」教育によって、その後の翻訳と教育の事業の基礎を作り上げたことがうかがえる。幼少期から習い始めたので、比較的容易に言語を獲得できていたと考えてもよいだろう。張我軍自らも「日本語は日本人と同じように自由に話せるが、日本語の文法をわざわざ研究したことがない。（我虽然会说日本话说得和日本人一样的自由，但是我却未曾专门研究过日文语法。）」[8]「自分が日本語を勉強しているとき、文法なんて気にしていなかった。自然に、読んだり、書いたり、話したりできるようになった。（自己学习日文的时候，并没有注意什么文法，自然而然就会说，会看，会写了。）」[9]そのため、張我軍が日本語講師として働き始めた時、文法を教えることができず、学生の質問に対しても解答できる知識がなかった。そこで彼は日本語の文法や教授法の研究を始め、のちに彼の人生の事業となった。

中国語に関する履歴：

1918 年　台北新高銀行に就職する。週末は万華間で漢文を勉強する。

1920 年　元清朝の秀才・趙一山先生のもとで漢詩を学ぶ。

1921 年　大陸廈門市の新高銀行支店に転勤する。厦門の同文書院で漢文を学ぶ。

1922 年・1923 年　複数の律詩を作成した。

1924 年　国立北京師範大学夜間部の塾に学ぶ。漢文の勉強も続けている。またその時期、白話（中国語の口語体）の新詩に惹かれて、この年に新詩を 11 編書いた。翌年に単行本『乱都の恋』に収録され、台湾文学史上初めての新詩集として出版された。

1925 年　自費で『中国国語文（白話）作法』を台北で出版した。

1927 年　北京の私立中国大学国語系に合格し、翌年 10 月に国立北京師範大学国文系に編入した。

1947 年　台湾に戻ってから『国文自修講座』(台中六合書店、全 5 冊)を編集出版した。

以上から明らかなように、張我軍は卓越した日本語能力の持ち主というだけでなく、中国

[7] 『日本語法十二講』序、人文書店、1932 年 9 月（『張我軍全集（下）』台海出版社、2012 年 9 月、401 頁）を参照。
[8] 注 7 に同じ。
[9] 注 7 に同じ。

語も体系的に学んできた。また 1921 年から 1924 年まで、張我軍は大陸に滞在していたため[10]、当時大陸で盛んになっていた五四運動と新文学運動（白話運動もその一つ）に大きく影響されたと考えられる。五四新文学運動の影響を受けて、台湾に戻り、台湾新文学運動の先駆者として、白話の普及につとめた。

そのほか、張我軍は北京在住期間に人脈もかなり広げていた。1927 年、北京師範大学に進学してから、周作人や銭稲孫といった日本文学の分野で活躍している著名人と知り合った。友人である洪炎秋によれば、彼らの紹介によって張の翻訳が雑誌に掲載されて、訳本としても出版されるようになり、名声が徐々に高くなっていった[11]。

志賀直哉との出会いも魯迅と周作人との交流に基づいていると考えられる。魯迅と周作人は五四新文学運動の主力として、白樺派の人道主義の精神を目的に、それらの作品を多く翻訳した[12]。周氏兄弟の活動は、張の翻訳選定に大きな影響を与えた[13]。1926 年 2 月、武者小路実篤『愛欲』を初の文学作品の翻訳として、『台湾民報』に発表した。同年 6 月に、再び進学するために北京に行ったとき、張は魯迅をわざわざ訪問した。その際に『台湾民報』の 4 冊を魯迅に贈った。その中に『愛欲』が収録されていると考えられる。その後も張我軍は白樺派の作品を多く翻訳してきた[14]。故に張はまず、周氏兄弟の翻訳と紹介によって、志賀直哉を知った可能性が高く、また白樺派文学に感銘を受けていたと考えられる。さらにそれだけでなく、この二人にさらに近づくために、白樺派の作品を翻訳したとも言えるだろう。

しかし、張我軍の翻訳研究では、志賀直哉の作品では「母の死と新しい母（母亲的死和新的母亲）」にしか言及されておらず、『日文与日語』に掲載された志賀直哉の「転生」については、取り上げられたことがない。『張我軍全集』の作品目録にも記録されておらず、見落とされた訳文と言える。なぜ張我軍は数ある志賀の小説の中でも「転生」を選定し、訳したのだろうか。それは『日文与日語』という掲載媒体の性質に深く関わっていると考えられ

---

[10] 張我軍は 1921 年に仕事の都合で大陸の厦門に渡り、1923 年に勤務していた新高銀行厦門支店が倒産した後、厦門から船に乗って上海へ渡り、「上海台湾青年会」に参加した。その後、上海から北京へ移動し、北京の大学に進学することを決めたが、合格できず、1924 年 10 月末に北京から台北に戻った。

[11] 洪炎秋「懐才不遇的張我軍兄」（張光正編『近観張我軍』台海出版社、2002 年 2 月、21 頁）を参照。

[12] 周作人が 1918 年に紹介した武者小路実篤「ある青年の夢」を、同年魯迅が翻訳した。また魯迅は有島武郎の作品も多く翻訳した。志賀直哉について、周作人は最初の訳者であり、1921 年に短篇小説「網走まで」「清兵衛と瓢箪」を翻訳した。張我軍が翻訳した夏目漱石『文学論』（上海神州国光社、1932 年 11 月）の序に、周作人は夏目漱石の『吾輩は猫である』にかなり愛着があることを自ら述べており、一方夏目漱石以外の作家でこのようなおもむきがあるのは志賀直哉と佐藤春夫だけではないかと提起した。したがって志賀直哉に対して周作人は評価も高く、愛読もしていると思われる。

[13] 徐紀陽「張我軍的翻訳活動与“五四”思潮—兼論与魯迅、周作人之関係」（『瀋陽師範大学学報（社会科学版）』2011 年 12 月）を参照。

[14] 有島武郎『生活与文学』（上海北新書局、1929 年 6 月）、武者小路実篤「創作家的資格」（『華北日報』副刊、1929 年 11 月）、志賀直哉「転生」（『日文与日語』第 1 巻第 9 期・第 10 期、1934 年 9 月・10 月）、志賀直哉「母の死と新しい母」（『館刊』第 5 期、1938 年 12 月）、武者小路実篤『黎明』（上海太平洋書局、1944 年 4 月）がある。

る。

2. 『日文与日語』について

『日文与日語』は人人書店から出版されていた日本語教育の雑誌である。1934 年 1 月 1 日に創刊され、1935 年 12 月 1 日に停刊された。刊行期間はちょうど 2 年であった。張我軍は編集長であり、周作人と銭稲孫を顧問編集者として招請した[15]。

まず『日文与日語』の創刊目的は次の通りである。

原文：一、以日本国民性为中心，介绍日本人的思想、风俗、人情、学术文化，倘能力所及，尚希望对日本目前的政治经济社会各种问题加以评释。二、养成国人阅读日文书报的能力。这是促进国人正视、研究、认识日本的最积极最切实的方法。我国目前介绍日本国情的书报即如前述，聊聊无几，国人虽有志研究日本而正视之，认识之，亦无从下手。即使目前有人在介绍，也是远水救不了近火，故最善的方法，还是使国人能直接阅读日文书报。因此，我们目前的工作，是要偏重于这方面的。

日本語訳：一、日本の国民性を中心に、日本人の思想・風俗・人情・学術文化を紹介し、また余力があれば、現在の日本の政治・経済・社会におけるさまざまな問題も紹介したい。二、中国人の日本語の書物を読む能力を養いたい。これは中国人が日本を正視し、研究し、認識することを促進できる最も積極的で切実な方法である。わが国の現在の日本の国情を紹介する書物は、すでに述べたように、わずかである。中国人は日本を研究しようという志を持ちながら、それを直視し、認識する物がないと、どうすることもできない。いまさら紹介されても遅すぎるので、故に最善の方法は、中国人が直接日本語の書物を読めるようにすることである。したがって、現在のわれわれの仕事は、その面に重点をおいている。

（「『日文与日語』的使命」『日文与日語』創刊号、1934 年 1 月）

---

[15] なお、『日文与日語』の〈支援〉はないと考えられる。支援（patronage）：「支援は権力のことで、文学を読んだり、書いたり、リライトしたりすることを促進、もしくは阻害する人や機関を指し、文学の詩学よりもイデオロギーと関わることが多い。支援は個人、集団、宗教団体、政党、社会階層、宮廷、出版社、メディア（出版、そのほか）によって使行される。」（モナ・ベイカー、ガブリエラ・サルダーニャ編『翻訳研究のキーワード』196～197 頁）最終号（1935 年 12 月）の「別矣読者（さらば読者）」で、張我軍はいかなる手当も受けず、広告料もないことを述べた。販売する人人書店は張我軍の友人である洪炎秋が経営していて、また張自身もこの書店の投資人の一人である。機関、出版社などが張我軍訳のリライトに大きな影響は及ぼしていなかったことと考えられる。

本誌の発売と流通の状況について、前述の「別矣読者」に書かれた「毎期三〇〇〇部売れている」のほか、同期に掲載された「人人書店緊要啓示」にも情報が記載されている。「弊店が『日文与日語』を発行して以来、全国各省で普及しただけでなく、日本、シャムなどの国まで、甚だ光栄に存じます！（敝店发行之「日文與日語」出版以来叨蒙学界垂青，推行全国各省，且及于日本，暹罗等国，甚觉荣幸！）」と、つまり中国国内にとどまらず、日本やタイなどにも輸出され、影響力は大きいものと見られる。

端的に言えば、創刊の最終目的は中国人に日本を認識させるということであろう。ここには、同時代の中国の状況が大きく関わっている。1928 年から 1937 年までの 10 年間に、文学革命・新社会科学運動・国民政府の対日戦争準備などの影響を受けて、日本や西洋から学ぶという風潮が盛り上がっていた。その影響により、日本書の翻訳が大幅に増えていき、歴史・文学だけでなく、政治・経済に関する書籍の翻訳も大量に増加した[16]。実際、表 1 で示したように『日文与日語』に掲載された翻訳作品の選定も、当時の中国社会における翻訳選定と一致している。したがって、当時の＜詩学[17]＞と＜イデオロギー[18]＞の影響を張我軍は受けていることが伺える。

表 1『日文与日語』における翻訳文学

刊行時期	巻-期	コラム名	執筆者	作品名／作家
1934.1.1	1-1	高級日語講座	銭稲孫 張我軍	「狂言記」正岡子規（『病牀六尺』の一節） 「現代政治思想之主潮與其缺憾」大山郁夫（『政治の社会的基礎:国家権力を中心とする社会闘争の政治学的考察』）
1934.2.1	1-2	高級日語講座	廃兵 張我軍	「セメント樽の中の手紙」葉山嘉樹 「現代政治思想の主潮とその破綻」（続前期）大山郁夫
1934.3.1	1-3	中級文範 高級日語講座	未署名 迷生 張我軍	「正直であれ」吉田絃二郎 「侏儒の言葉」芥川龍之介 「現代政治思想の主潮とその破綻」（続前期）大山郁夫
1934.4.1	1-4	中級文範 名著譯註	未署名 迷生 張我軍	「ヨオロツパ文明の行詰り」高須芳次郎 「静夜日記」生田春月 「現代政治思想の主潮とその破綻」（続前期）大山郁夫

[16] 背景の説明について、田雁著『近代中国の日本書翻訳出版史』（小野寺史郎・古谷創訳、東京大学出版会、2020 年 12 月）を参照した。

[17] 詩学（poetics）:「特定の時期において文学システムを支配する芸術的規範のことである。項目（inventory）と機能（function）という 2 つの要素からなっている。項目の要素にはジャンル・文学装置・モチーフ・特定のシンボル・プロトタイプ的な人物像もしくは状況が含まれる。機能的要素は文学が社会においてどのように機能すべきか、もしくは機能しうるかという問題と関わる。」（モナ・ベイカー、ガブリエラ・サルダーニャ編『翻訳研究のキーワード』196 頁）

[18] イデオロギー（ideology）：「翻訳は支援要素（イデオロギー、経済、ステータス）に特に大きく左右されると主張する。」（モナ・ベイカー、ガブリエラ・サルダーニャ編『翻訳研究のキーワード』108 頁）

1934.5.1	1-5	中級文範 名著譯註	張我軍 廃兵 張我軍	「論理学の性質」速水滉（『倫理学』） 「雷雨の夜」二葉亭四迷（二葉亭四迷訳、ゴーリキー著『乞食』） 「現代政治思想の主潮とその破綻」（続前期）大山郁夫
1934.6.1	1-6	中級文範 名著譯註	張我軍 廃兵 迷生 張我軍	「論理学の性質（下）」速水滉 「晩秋の日」小川未明 「低能児」加藤武雄（『感謝』） 「現代政治思想の主潮とその破綻」（続）大山郁夫
1934.7.1	1-7	中級文範 名著譯註	迷生 野馬 廃兵 張我軍	「思想」金子馬治（『欧州思想大観』） 「風文語文」徳富蘆花（『自然と人生』） 「武器（侏儒の言葉）」芥川龍之介 「現代政治思想の主潮とその破綻」（続）大山郁夫
1934.8.1	1-8	中級文範 名著譯註	廃兵 廃兵 張我軍	「社会思想の部類」高畠素之（『社会思想講座』） 「要談と閑話（文語）」徳富蘇峰 「現代政治思想の主潮とその破綻」（続）大山郁夫
1934.9.1	1-9	中級文範 名著譯註	廃兵 廃兵 野馬 迷生 張我軍	「母と蘆」西條八十 「浪漫的結婚と倫理的結婚」米田庄太郎（『恋愛と人間愛』） 「うれしさ（文語）」幸田露伴 「批評と鬥志」片上伸（『文学評論』） **「転生（小説）」志賀直哉**
1934.10.1	1-10	中級文範 名著譯註	廃兵 迷生 張我軍	「科学の特質」石原純 「批評と闘志（続完）」片上伸 **「転生（続完）」志賀直哉**
1934.11.1	1-11	中級文範 名著譯註	廃兵 迷生 張我軍	「社会思想史序説」波多野鼎 「芥川龍之介君よ（文語）」菊池寛 「少年の悲哀」国木田独歩
1934.12.1	1-12	中級文範 名著譯註	廃兵 張我軍	「不潔を厭はぬ人々」田上三郎（『世界の奇習と奇観』） 「少年の悲哀（続・完）」国木田独歩
1935.1.1	2-1	高級日本語講座： 名著譯註	 張我軍	 「空想的社会主義　一」堺利彦（堺利彦訳、エンゲルス著『社会主義の発展:空想的社会主義から科学的社会主義へ』）
1935.2.1	2-2	高級日本語講座： 高級文範 名著譯註	 張我軍 張我軍	 「菖蒲の節供」島崎藤村 「空想的社会主義　二・三」堺利彦

1935.3.1	2-3	高級日本語講座：		
		高級文範	張我軍	「吾輩は猫である」夏目漱石
		名著譯註	張我軍	「空想的社会主義　四」堺利彦
1935.4.1	2-4	高級日本語講座：		
		短篇小説譯註	張我軍	「勝負事」菊池寛
		社会科学論著譯註	張我軍	「空想的社会主義　五」堺利彦
		自然科学論著譯註	M.S.	「アメリカの発明界展望」矢部利茂
1935.5.1	2-5	高級日本語講座：		
		短篇小説譯註	張我軍	「勝負事（続）」菊池寛
		社会科学論著譯註	張我軍	「空想的社会主義　六」堺利彦
1935.6.1	2-6	高級日本語講座：		
		短篇小説譯註	張我軍	「勝負事（続完）」菊池寛
		社会科学論著譯註	張我軍	「空想的社会主義　八・九」堺利彦
1935.7.1	3-1	高級日本語講座：		
		高級文範	張我軍	「空襲と民心の統制」保科貞次（『防空の科学』）
		短篇小説譯註	張我軍	「絵のない絵本」林房雄
1935.8.1	3-2	高級日本語講座：		
		高級文範	張我軍	「空襲と民心の統制（續き）」保科貞次
		短篇小説譯註	張我軍	「絵のない絵本（續き）」林房雄
1935.9.1	3-3	高級日本語講座：		
		高級文範	張我軍	「現代世界外交思潮及びその動向」芦田均
		短篇小説譯註	張我軍	「絵のない絵本（續き）」林房雄
1935.10.1	3-4	高級日本語講座：		
		高級文範	張我軍	「現代世界外交思潮及びその動向」芦田均
		短篇小説譯註	張我軍	「悪魔」谷崎潤一郎
1935.11.1	3-5	高級日本語講座：		
		高級文範	張我軍	「現代世界外交思潮及びその動向」芦田均
		短篇小説譯註	張我軍	「悪魔（続）」谷崎潤一郎
1935.12.1	3-6	高級日本語講座：		
		高級文範	張我軍	「現代世界外交思潮及びその動向」芦田均
		短篇小説譯註	張我軍	「悪魔（続）」谷崎潤一郎

表 1 に示した通り、社会主義思想の理論、プロレタリア文学、国際政治・経済に関する論説などが多く訳されていた。まさしく創刊目的で述べられていた通り「日本の国民性を中心に」、「日本人の思想・風俗・人情・学術文化」を紹介しつつ、「政治・経済・社会の問題」を提示していたことが分かる。さらにこれらは日本語学習のためにすべて対訳の形式で掲

載されていた。

「転生」は「名著譯註」（第 2 巻第 1 期から「高級日本語講座」に収めることになった）というコラムに掲載されていた。「日本語を学び、日本を研究する」という創刊目的から見れば、「転生」が選定された理由は、前述した周氏兄弟とのつながりだけではなく、「転生」のテクストは日本語の学習に役立つと同時に、日本の国民性を体現し、中国人に日本をより良く理解させることができると張が考えたためだと推測できる。さて、この＜イデオロギー＞はどのように張我軍のリライトに反映されたのだろうか。

3. 「転生」訳文の具体分析

日本語学習の読本として選定された「転生」を、リライトに反映された＜言説領域[19]＞と＜言語[20]＞を中心に、具体的に分析していく。銭稲孫訳及び楼適夷訳と比較しながら、張我軍のリライトの特徴を解明する。張のリライトの特徴としては、以下の五つの要点がある。

3.1 原文の構成に忠実

張我軍は本誌（「怎麽様学習日文（どのように日本語を勉強するか）」第 1 巻第 2 期、1934 年 2 月）で、文の構成が日本語学習の難点だと指摘した。そこで、張我軍は対訳の形式を用いて、できるだけ原文の語順に従って、非常に詳しく訳したと考えられる。日本語学習者に原文と母語の構成上の異同を認識させ、日本語の文法や文型をより深く理解させることを目的としている。

表 2

	張我軍	銭稲孫	楼適夷
男は細君を愛して**は**居たが、	這個人**到是**愛他的妻子（筆者注：「到」同「倒」），	愛**倒是**愛她；	他非常爱他的妻子，
その気が利かない事ではよく腹を立て、癇癪を起し、	但屢次因其死心眼而生氣，動起肝火，	只為她的不機靈，時常生氣，發火，	但对妻子的愚笨，常常生气，
意地悪い小言を續け様にいつて細君を困らした。	接二連三地说了些叫人難堪的牢騷（筆者注：「叫」同「叫」），窘了他的妻子。	把些刻毒話兒來嘮叨她。	老是骂她，把妻子搞得很苦恼。

[19] 言説領域（universe of discourse）：作者が自分の作品の中に自由に取り入れられる知識、学識、その時代の物や風習。（モナ・ベイカー、ガブリエラ・サルダーニャ編『翻訳研究のキーワード』196 頁）

[20] 言語（language）：「言語に関しては、ルフェーヴルは SL と TL との差異、およびその時代に支配的な芸術的基準とイデオロギー等が規定する様々な言語的なシフトを検討している。」（モナ・ベイカー、ガブリエラ・サルダーニャ編『翻訳研究のキーワード』196 頁）

例えば、「男は細君を愛しては居たが」の翻訳について、張我軍と銭稲孫が「してはいた」における文法的な意味を正確に訳出しているのに対し、楼適夷はその意味を訳さず、直接に「他非常爱他的妻子（男は細君を非常に愛していた）」と表現した。一方、張我軍と銭稲孫はともに正確に訳しているが、銭稲孫の訳はさらに口語化されており、原文の構造を過剰に変更させているのに対し、張我軍は原文と同じ主語と述語の書き方で原文の構造を維持したまま訳した。この句の後半について、銭稲孫と楼適夷の訳文は張のものと比べて省略されている。銭稲孫は「細君を困らした」の部分を省略し、「續け」も訳していない。楼適夷は「意地悪い小言を續け様にいつて」を簡単に「老是骂她（いつも彼女を叱る）」と訳した。どちらも原文の構造を捨てたのである。

もう一例を挙げよう。

表 3

	張我軍	銭稲孫	楼適夷
然し、一たん蟲の居所が悪いとなると、	可是一旦心裏有不對勁兒的時候，	一朝有些脾胃不對勁，	可是心里一不高兴，
自分でも苦しくなる程、彼には小言の種が眼に押し寄せて来た。	在他，牢騷的材料便擁擠到他的眼前，弄得他自己都難堪了。	就覺得滿眼盡是來招氣的，簡直受不了。	他就动不动发牢骚。
左ういふ時彼は加速度に苛苛し癇癪を起し、自分で自分が浅間しくなるのであつた。	這種時候，他就加速度地坐立不安，動起肝火，自己都覺得自己可哀了。	這，就越來越火，火得自己都覺得沒出息了。	那时他火气特别大，自己也觉得不对头。

張我軍は「一たん蟲の居所が悪いとなると」を「一旦心裏有不對勁兒的時候」と訳し、またその解説に「「蟲の居所が悪い」：「不對勁兒」」と書いた。銭稲孫の訳では、中国語によくある言い方である「脾胃不對勁（胃の調子が悪い）」と表現し、同じ意味を伝えている。一方、楼適夷は直接「不高兴（機嫌が悪い）」と訳した。また後半の「自分でも苦しくなる程、彼には小言の種が眼に押し寄せて来た」についても、楼適夷は「他就动不动发牢骚（彼は常に小言を言う）」とかなり省略して訳した。これに対して、銭稲孫の訳は楼適夷ほど省略されていない。一方、張我軍は「小言の種」を「牢騷的材料」、「眼に押し寄せて」を「擁擠到他的眼前」のように一語一語訳している。語順が逆になったとはいえ、これは致し方ないことである。中国語の語順が原文の構造に従っているとすれば、違和感があるに違いない。中国語の習慣に合わせて修正を加えることで、訳文の流暢さを保証している。「左ういふ時彼は加速度に苛苛し癇癪を起し、自分で自分が浅間しくなるのであつた。」この文も同様で、張我軍は原文に忠実だが、表で示されたように銭稲孫と楼適夷の訳ではかなりの省略や言い換えをしている。張我軍の訳では、「加速度に」を「加速度地」、「苛苛し」を「坐立不

安」、「癇癪を起し」を「動起肝火」といったように、順番に丁寧に訳している。

3.2　時制の正しさ

中国語は時制のない言語であるが、助詞・副詞・文脈などにより時制が表現できる。

表 4

	張我軍	銭稲孫	楼適夷
「私、それがいやなの。それがいやなのよ」と細君は泣く。	“我，就是恨這個！就是恨這個！”妻子說著哭起來。	“這，我就煩；我煩的就是這個。”太太哭了。	“讨厌，你真讨厌！”妻子哭了。
「つまり貴方があんまりお利口すぎるのね」或朝良人が珍らしく機嫌のいい時、細君は笑ひながらこんな事を云つた。	“總而言之是您太機靈了呵！”一天早上，丈夫心裏痛快得少見的時候，妻子笑著那麼說了。	難得一天湊著男人高興，太太笑著說：“總而言之，是你太聰明了。”	“总之，你是聪明过头了。”有一天，难得碰上丈夫脾气好的时候，妻子笑着对他说。
「貴方さへおつき合ひ下さるなら……」細君は笑つた。	“只要您肯賞臉……”妻子笑了。	太太笑道：“只要你肯陪我……”	“只要配得上你……”妻子笑了

表 4 では、妻が話しているときの描写を例に挙げた。

「細君は泣く」について、「泣く」は現在時制で、故に張我軍は「说着哭起来（言いながら泣き出す）」と訳した。「起来」を動詞の後に用いると、動作が開始し持続していくことを表現できる。しかし銭稲孫と楼適夷はともに「哭了（泣いた）」と訳した。「了」は動作の完了を示し、一般的に過去形である。他の二つの例も同じである。「細君は笑ひながらこんな事を云つた」について、張我軍は「妻子笑着那么说了」と時制を正確に訳したが、銭稲孫と楼適夷は「笑著說：……」「笑着对他说」と訳し、「云つた」を現在時制に変えている。

銭稲孫と楼適夷は時制を正確に訳すところもあるが、結局のところ意味が正確に伝われば いいということで、時制にはあまりこだわっていないことが分かる。一方、張我軍の訳文は日本語の教材として、時制へのこだわりが明らかなのである。

3.3 敬語を明示

表 5 で示している通り、張我軍は敬語を使った原文を訳すとき、二人称は必ず「您（「你」の敬称）」である。「御家族」も、張我軍は「贵家庭」と訳し、尊敬を表す「贵（貴）」を付けた。「賞臉」も、自分の立場が劣っていることを自覚し、目上の人に自分の要求を受け入れてもらうための丁寧な言葉である。一方、銭稲孫と楼適夷は人称を工夫せず、「你」を使っている。表から見れば、銭は楼に比べて敬語の存在を意識しているということが読み取

れる。例えば「御家庭」に対して、尊敬語である「府上」を選定した。楼は「家庭（家庭）」と直訳した。

表 5

	張我軍	銭稲孫	楼適夷
貴方は私のやうな気の利かない奥さんをお貰ひなつた事を心では後悔してゐらつしやるでせう？	**您**一定在心裏後悔著娶了像我這樣死心眼的太太的。	**你**娶了我這麼個不機靈的太太，心裏可後悔吧？	**你**娶我这样的太太，一定很后悔。
貴方さへおつき合ひ下さるなら……	只要**您**肯**賞臉**……	只要你肯陪我……	只要配得上**你**……
これは貴方の御家庭がモデルなのでせう	這是**您**的**貴家庭**做的模特兒吧？	這話兒莫非編的就是**府上**的事？	这是**你**拿自己的**家庭**作模特儿的吧？

3.4 感嘆符と疑問符の多用

張我軍は原文のニュアンスと口調にかなり注意して、相応的に感嘆符や疑問符などを付けている。その理由としては、張は主に直訳なので、意訳と比べるとややぎこちないテクストになるため、可能な限り原文の構成に忠実なまま、感嘆符や疑問符などで感情を動かす役割を果たしていると思われる。

簡単に二例を挙げる。

表 6

	張我軍	銭稲孫	楼適夷
「貴方は私のやうな気の利かない奥さんをお貰ひなつた事を心では後悔してゐらつしやるでせう？屹度さうに違いない」	『您一定在心裏後悔著娶了像我這樣死心眼的太太的。一定是那样的！』	「你娶了我這麼個不機靈的太太，心裏可後悔吧？准是的了。」	“你娶我这样的太太，一定很后悔。对不对？”
「後悔してゐる」	『不錯，後悔著。』	「嗯，可不？」	“唔，当然后悔。”
「本統に？」	『真的嗎？』	「真的嗎？」	“真的？”
「本統に。…」	『真的！……』	「可不是呢？」	“真的，……”
「私、それがいやなの。それがいやなのよ」と細君は泣く。	『我，就是恨這個！就是恨這個！』妻子說著哭起來。	「這，我就煩；我煩的就是這個。」太太哭了。	“讨厌，你真讨厌！”妻子哭了。
鴛鴦か狐かが分からなくなった。	然而是鴛鴦呢？是狐狸呢？這就說不清了。	只是記不清是鴛鴦還是狐狸。	可记不准到底做鸳鸯还是做狐狸。

表から張我軍が銭稲孫と楼適夷より圧倒的に多くの感嘆符を使っていることが分かる。感嘆符によって、会話での妻と夫の感情はより一層激しく表現された。「屹度さうに違いない（一定是那样的！）」から、夫が「意地悪い小言」を言い続けている時、妻は刺激されて悲しんでいたので、強い口調で「私と結婚したことを後悔しているに違いない！」と言った。それに対して夫が「本統に。（真的！）」と返答した。お互いの感嘆符から見れば、怒っている様子がうかがえる。妻と叫び合って、本当にケンカをしているような雰囲気である。ここでの感嘆符の使用から見れば、読者としての張我軍が、この場面の夫婦の会話に確かにこのようなニュアンスを読み取ったことが分かる。原文に対するこのような理解を、張は自らの訳文に加えたのである。感嘆符によって原文の意味を伝えようとし、読者に分かりやすく原文の感情を伝えることが一番大事だと考えていることが分かる。故に、このような夫婦の会話での感嘆符の多用により、全文において張の訳文には感嘆符が24 個ある。一方、銭稲孫と楼適夷の訳文にはそれぞれ同じく 8 個しかない。

また疑問符について、張の訳文に 21 個あり、銭は 18 個を使っており、楼は 14 個である。例えば、「鴛鴦か狐かが分からなくなった」の翻訳では、張我軍は「然而是鴛鴦呢？是狐狸呢？這就說不清了。（鴛鴦か？狐か？分からなくなった。）」と訳し、「鴛鴦か」と「狐か」をそれぞれ単独の文として直訳し、いずれも疑問符をつけた。銭稲孫と楼適夷のバージョンは、二つの疑問文を別途に訳さず、そのまま一つの文にまとめ、「还是（あるいは）」で「鴛鴦」と「狐」をつなぎ、選択の関係を形成した。銭稲孫の訳は「只是記不清是鴛鴦還是狐狸」、楼適夷の訳は「可记不准到底做鸳鸯还是做狐狸」、同じく「鴛鴦あるいは狐かが分からなくなった」の意味なのである。ここの疑問符の使用は、張我軍が原文の構成に忠実であるからと言えるだろう。

3.5　中国要素の強調

「転生」というテーマは中国における馴染み深い題材である。また「鴛鴦」という要素も中国人にとってかなり身近な象徴の一つである。本来「鴛鴦の契」も中国から日本へ伝わってきた物語である。中国の神話や作品の中では、鴛鴦が現れる頻度が非常に高い。例えば唐代の詩人である盧照鄰が作った七言古詩「長安古意」に「得成比目何辞死，愿作鸳鸯不羡仙（比目を成すを得ば何ぞ死を辞せん、願わくは鴛鴦と作りて仙を羨まじ）」という名句がある。張我軍が＜言説領域＞を意識し、中国の読者にとって受け入れやすいテクストを選んだことを証明している。

さらに張は以下の表で示したように、＜言説領域＞に意識的に合わせて訳した。三人の訳者とも「類は友を呼ぶ」という「譬」を中国の熟語「物以類聚」として訳している。「類は友を呼ぶ」は中国の『易経・繫辞上伝』の「方以类聚，物以群分（方は類を以て集まり、物は群を以て分かたる）」に由来している。張我軍だけは「正如俗語所雲（俗語の言う通り）」という言葉を加えて強調している。これは原文にも「譬」という言葉がある故だが、このことからも張我軍が意識的に中国文化の要素を強調して翻訳していることが分かる。

表 7

	張我軍	銭稲孫	楼適夷
類は友を呼ぶの譬に洩れず	正如**俗語**所雲“物以類聚”	還真是物以類聚	物以类聚
「…他に夫婦仲のいい動物あつて？」「鴛鴦かな？ゑんおうの契りで」	『……以外還有夫妻和美的動物嗎？』『就是鴛鴦罷？**俗語**有所謂鴛鴦之盟。』	「……另外還有什麼夫妻要好的呢？」「鴛鴦罷？和氣鴛鴦。」	“……还有什么动物夫妻最和睦的？”“是鸳鸯罢，所谓同命鸟。”
死んだ良人は約束通り鴛鴦に生まれ変つて、細君の死ぬのを待つて居た。	死了的丈夫，依著盟誓轉生為鴛鴦，等著妻子之死。	死了的丈夫呢，按原說投身了只鴛鴦，專等太太死來。	死了的丈夫，按照和妻子的约定，转生为一只鸳鸯，正等着妻子的死亡。

「ゑんおうの契りで」の翻訳から、この翻訳ストラテジーがよりはっきり見える。銭稲孫は「和氣鴛鴦（和気鴛鴦）」と訳し、楼適夷は「所谓同命鸟（所謂同命鳥）」と訳した。それに対して、張我軍は「俗語有所謂鴛鴦之盟（俗語にはゑんおうの契りというのがある）」と訳し、「俗語」を強調した。中国語で「俗語」は口語性と通俗性を持つ言語単位で、通俗的で広く流行する定型的な語句であることを指す。これを「俗語」に翻訳したのも、これらの熟語が中国文化であり、中国の読者に非常に近いという事実をより強調したかったためだろう。張我軍が＜言語＞と＜言説領域＞を意識し、訳文に原文から見られる中国文化を強調したいため、「俗語」によって「ゑんおうの契り（鴛鴦之盟）」を焦点化し、中国文化の要素を引き立たせたと思われる。さらに、「えんおう」の発音も中国語の発音（yuānyāng）に近いため、日本と中国の文化が近いことを示唆し、中国人にとってより親しみやすい文章になっている。後文の「約束通り鴛鴦に生まれ変つて」の翻訳では、「約束」という言葉について、銭稲孫は「按原说（前に言った通り）」、楼適夷は「约定（約束）」と訳している一方、張我軍のバージョンでは「盟誓（盟約、誓約）」と訳されている。したがって「盟誓」という言葉は原文の「約束」の意味よりずっと固く、「ゑんおうの契り（鴛鴦之盟）」の意味を改めて強調するものとなっている。以上から、張我軍が＜言語＞において原文の構造と意味をできるだけ変更しないまま、翻訳の過程で＜言説領域＞に合わせて、中国の読者が受け入れやすいように努力していることがうかがえる。

また、「類は友を呼ぶ」と「ゑんおうの契り」は慣用句・熟語であり、これも張我軍が「転生」を選定した理由だと思われる。前述した「怎麽様学習日文（どのように日本語を勉強するか）」（『日文与日語』第 1 巻第 2 期、1834 年 2 月）で、張我軍が日本語学習の難点は、文の構成のほか、慣用句・熟語の認識と使用を挙げることができると指摘した。「転生」のテクストでは慣用句・熟語などを用いているため、「高級日本語講座」の読本として相応しいと考えられたのだろう。

そのほか、「転生」の選定において、その内容の半分が「お伽噺」であることも一つの要因だと考えられる。『日文与日語』第 3 巻第 6 期に掲載された「民国二十五年以後的工作」という記事で、停刊後の 1936 年 1 月以降の予定について、『対訳詳解日本童話選集』（以下『日本童話選集』と略称）を編集したいと張我軍が言及している。1942 年に北京新民印書館から出版された『日本童話選集』の「訳注例言」において、張我軍は次のように述べていた。

> 原文：一国国民的童话，最能看出那个国民的性格，而有国民的性格可以了解那个国民的人情风俗习惯；不但为研究一国的文化，这是必须走的第一步，即仅为学习一国的语言文字，也非藉此无由澈底。
>
> 日本語訳：一国の国民の童話には、その国民の性格が最もよく見られる。国民の性格が分かれば、その国民の人情・風俗・習慣を理解することもできる。一国の文化を研究するためには、これが必要な第一歩であり、また一国の言語や文字を学ぶためにも、これをもってして無駄でない。

張我軍は童話を三つに分類した。「一つ目は古典に散見される古典童話であり、二つ目は口承で伝えられた童話であり、三つ目は文芸家が創作した文芸童話である。（一是古典童话，那是散见于古代典籍中的；二是口碑童话，那是口碑相传流布于民间的；三是文艺童话，这是文艺家所创作的作品。[21]）」選集に収録されているのは、すべて口承で伝えられた童話である[22]が、1934 年に『日文与日語』に掲載された「転生」は、いわば「文芸童話」であった。「訓話」の性格を持ち、日本の国民性や風俗人情などを垣間見ることができる作品だと張我軍が考えて選定したのではないだろうか。「転生」の選定は、その後、張我軍が日本童話選集を出版するきっかけになったといってよいだろう。

最後に、小説の内容からその選定目的を分析する。「転生」の結末では、妻が夫を食べてしまう。このように女性が男性に反発するという表象は、一種の暗示とも考えられる。「転生」の妻は、夫の愚痴に耐えながら従順に生きてきたが、転生後、ついに本能に従って夫を殺した。「被支配者」とされてきた女性が、「支配者」である男性に反抗し、成功する。このような表象は、支配されている植民地からの、「支配者」である植民者に対する見えない抵抗かもしれない。このような「転生」の読み方は、『日文与日語』の＜イデオロギー＞の影響から見れば可能だと思われる。

---

[21] 『日本童話集』編者序（『張我軍全集（下）』台海出版社、2012 年 9 月、378 頁）を参照。

[22] 上巻には「桃太郎」「花咲爺」「猿蟹」「舌切雀」「カチカチ山」が、下巻には「鼠ノ嫁入り」「海月ノお使」「猫ノ草紙」「文福茶釜」が収録されている。

おわりに

以上、リライト理論をもって張我軍訳を考察してきた。第 1 節では張我軍が周氏兄弟の翻訳と紹介によって志賀直哉と出会ったことを明らかにし、「転生」を選定した前提を示した。第 2 節では、掲載媒体である日本語教育雑誌『日文与日語』を紹介した。当時の「国の将来のために日本を研究する」という＜イデオロギー＞と＜詩学＞の影響を張我軍は受けて、『日文与日語』を創刊し、中国人に日本を認識させるため、日本の国民性が表れる作品を選定したことが分かった。第 3 節では、三つの訳文を比較検討した結果、張我軍訳は日本語教材として選定した故、＜言語＞にかなりの工夫を凝らしたものになっていることが明らかとなった。さらに張が原文の構造と意味をできるだけ変更しないまま、「ゑんおうの契り（鴛鴦之盟）」などの俗語を強調することによって、＜言説領域＞に合わせていることが分かった。

『日文与日語』最終号（1935 年 12 月）の「別矣読者（さらば読者）」では、過去二年間に雑誌に発表された文章は、正式な署名者を除いて、すべて張我軍一人の手筆であることが明らかにされた。つまり翻訳作品において、第 1 巻第 1 期で銭稲孫が訳した正岡子規の「狂言記」と第 2 巻第 4 期で M.S.が訳した矢部利茂の「アメリカの発明界展望」以外、すべて張我軍一人で選定し、訳したものということになる。葉山嘉樹、芥川龍之介、島崎藤村、夏目漱石、菊池寛、谷崎潤一郎などの文学作品以外に、例えば大山郁夫著『政治の社会的基礎：国家権力を中心とする社会闘争の政治学的考察』、エンゲルス著・堺利彦訳『社会主義の発展：空想的社会主義から科学的社会主義へ』など国際政治・学術理論に関する著作も多く訳された。幅広いジャンルを取り扱っていると言える。張我軍の翻訳能力はさまざまな分野に適用されていることを証明している。「はじめに」で示した通り、訳文を分析した上で張の翻訳能力を検討する研究は極めて少ない。そこで、張我軍訳「転生」をリライト理論の＜言語＞と＜言説領域＞に着目して考察を試みた本稿は、張我軍の優れた翻訳能力の実際を明らかにし、彼の翻訳研究に対しても一つの成果を示し得たはずである。

本稿はこれまで論じられてはこなかった、中国における初の志賀直哉「転生」の訳文を中心に検討した。引き続き、リライト理論をもって他の二つの訳文を考察し、テクストの具体的な差異とその背景を解明していく。

※付記　中国語引用の日本語訳は全て拙訳による。

（ちん　かぶん、広島大学大学院人間社会科学研究科博士課程前期在学）

Three different Chinese translations of Naoya Shiga's "Tensei," centering on Wojun Zhang's translation

Jiawen CHEN

Key Words: "Tensei," Wojun Zhang, translation analysis, selection objectives

There are three Chinese translations of Naoya Shiga's short story "Tensei" (Bungeisyunjyuu,1924.03,2(3)).

① Wojun Zhang translation Zaishi (next no. renamed: Zhuansheng) (*Riwen Yu Riyu*, 1934.09,10,1(9,10)).

② Daosun Qian translation Zhuansheng (*Beiping Modern Library Journal*,1938.03,07,(3,4))

③ Shiyi Lou translation Zhuansheng (*Qianniuhua*: Hunan Poeple's Publishing House,1981.08).

I have studied and compared the three translations above based on the revised theory. As Wojun Zhang's translation selected "Tensei" as teaching material, it turned out that he made considerable efforts in the "language." Furthermore, we find Zhang's accommodating the universe of discourse by emphasizing Chinese slang, such as "The Alliance of Mandarin Ducks." As there are very few studies that examine the translator Wojun Zhang's translation skills after analyzing his translations, this study, which focuses on the universe of discourse and language of the rewriting theory, confirms the excellence of Wojun Zhang's practical translation skills and shows one result for his translation studies.